



# その後 2

今まで知り合いになった舞台照明家と建築照明家、総勢50人近く(半分・半分)とお話をきて気づいたことがあります。舞台照明家は建築照明を毛嫌い、または『一緒にしないでくれ』感を醸し出す人が多く、建築照明家は舞台照明を敬う傾向が高いことに気づき始めました。それは、斬新で繊細な照明デザインは、劇場内だからこそ作れるものだし、複雑なシーンやタイミングの作り込みは、照明を扱うプロの中で、舞台照明家が断トツ優れているからです。そして舞台照明家は、3次元、4次元の空間と時間の捉え方、感覚が研ぎ澄まされている(人が多い)からではないでしょうか。もっとも、建築照明の世界は規則が多く、やたら明るくてつまらないものだと思われる方も多いようです。自分自身もそのように感じていたこともありました。特に戦後の日本の高度成長期は、いかに我々の生活を明るく照らすかということ、煌々たる明かり=希望に満ち溢れた環境を示していたようでした。

舞台照明の型みたいなのを、積極的にぶち破る姿勢で常に活動している、私が尊敬する英国の照明家、ルーシー・キャター氏や、サイモン・コーダー氏は、舞台照明機材に捉われず、こだわらないといった点と、劇場外のスケールでの照明演出も得意とする点で、共通していると感じます。実は、文化庁の新進芸術家海外研修制度の申し込みをしたとき、プランBの研修計画書は、サイモン・コーダー氏のアシスタントになることでした。私のプランについて、親身に相談に乗ってくださったコーダー氏でしたが、結局、在研の審査に落ちてしまったので、その願いも叶いませんでした。しかし、前回のエッセイでも綴らせていただいたとおり、それをキッカケに、新たな照明の道に進むことにしました。



パーティゴ(デンマークの会社)の作品「The Wave」

間接的ではありますが、コーダー氏もそれを温かく応援してくださっています。まだたくさん彼から学ぶ余地はあります。新たな道に進む自分は、今後待ち受けている期待と葛藤に立ち向かい、いずれ、彼と照明デザイン、機材や環境照明、ライトアートについて、情報交換できるくらいまで早く成長したいものです。そのためには、オープンマインドでたくさんの作品を観察し、社会への理解と疑問を常にもって、自分なりの『なぜ、その照明がその場に必要なのか』ということを見出していく必要があると思います。バックグラウンドや文化、宗教も年齢も違う人々が、その照明を見てどう感じるか。たとえ彼らの気持ちが読み取れなくとも、何らかの良い影響力を、精神的に物理的に人間に与える照明を考える。照明とは、『なんと責任重大で、魅力的なお仕事なのだろう』とつくづく思います。

『人のために、なにかできないだろうか』。この気持ちは、震災を次々に経験してきた、沢山の日本人の方が思っていることではないでしょうか。気持ちはあるけど、どう行動に起こしていいかわからない、という人も多いと思います。自分も、その一人でした。日本のことをしっかり理解しないまま、海外に飛び出してきた自分にとって、おまえは何様だ、と言われるかもしれないけど、飛び出してきた、はじめて気づく自国の大切さや美しさがあります。日本をでて、ようやく自分が日本人であった(わかってはいたけど、日本人としての意見を求められるときに感じる“I am a Japanese”)、という自覚を始まりました。いずれ日本に、照明の多様性や新たな可能性をもち帰り、人のために役に立てればいいと思います。漠然とした願いですが、できることからやってみるといふ姿勢は大事だと思っています。舞台公演で、観客に感動や喜びを与えることも、「世のため、人のため」だと思



照明祭 Lumiere Londonでのサイモン・コーダー氏の作品「Bough 3」

ます。観る人が限られてしまうのは、あまりにももったいないので、観客層をどんどん増やしていく工夫をするのも、今後の私たちに課せられた課題です。舞台は娯楽だけではなく、論議の場、憩いの場、教育の場、現実逃避の場、人と自分 - 過去と現在と未来を見つめ直す場でもあります。照明自体も、またそうです。『劇的な照明を求めて』を胸に、照明の巨匠たちが目指している先は、『人のために、なにかができるか』『それがどう繋がっていくか』という、強い希望と願いが込められているのではないのでしょうか。「我輩は満足じゃ」という巨匠がどこにもいないのは、彼らが常に先を見て、改善と進歩が宿命と悟っておられるからではないのでしょうか。

最後に、舞台照明家と建築照明家の話に戻りますが、どうして自分がこの両方を経験したいかという、それは単なる「飽き」ではなく、「空き」を感じたからです。自分のデザインの可能性の「空き/成長の余地あり」ということです。技術だけではなく、創造性の「空き」です。照明の奥深さに、発見は常に絶えないし、それが原動力となっていることに、喜びを感じられるのは本当にありがたいことです。